



町民文芸

只見短歌会 令和八年二月詠草

夕暮れは心静もる心地して今日のひと日を思ひ起こしぬ
目黒 富子

検診に出かけし病院待合に久しく会わぬ友と顔合う
関谷登美子

雪まつり晴れし会場三歳児声弾み跳ね冬駆け抜ける
立花 奏音

雪降りてぼやりと空に見ゆる陽の下に除雪機は弧を描きをり
新国由紀子

朝早く暗き道路を吹雪く中新聞配達の音遠く聞く
渡部ヨリ子

只見俳句会 二月定例会

Uターン十年目の冬囲炉裏談
馬踊るタオル頂く初物買い
真理子

気がつけば足もとふわふわ踏む落葉
窓を拭く男やもめの年暮るる
睦子

雪解けや枯れ草乾く通勤路
火の色に山肌染める雪祭り
尚 幸

子どもらの声の久しきどんどかな
紺碧の空の染み入る雪の層
恒 夫

はるかなる行程雪のきらめきぬ
川添えの雑木枝張る霜の花
礼

回覧を届ける声や春隣
シアトルの叔母のメールや雪見舞
修 一

鬼去りて春待つ窓に月明かり
春愁や中也の詩集色あせて
信

父の星母の星加えて冬銀河
子が菓立ち机の落書冬深し
都

侘助や名を知り活ける空瓶に
息白く厨の窓辺通る人
味代子

配膳のロボット愛でし二月の喪
熱潤や年に一度の好夫妻
一 恵

